

# 市政ニュース

「いのちへの共感に満ちたまちづくり事業」BE ALIVE! in TOYOOKA ～いま、豊岡で生きている～



▲トークライブ(左から、普天間かおりさん、黒田征太郎さん、中貝市長)

9月29日、いのちへの共感について、体験を通して考えていただく、いのちへの共感に満ちたまちづくり事業「BE ALIVE! in TOYOOKA」いま、豊岡で生きている!」を豊岡市民プラザで開催し、約200人が参加しました。

第1部では、短編物語「風になつたお母さん」を上映した後、シンガーソングライターの普天間かおりさんのコーディネートにより、イラストレーターの黒田征太郎さんと中貝市長がトークライブを行いました。

トークは、東日本大震災の被災地支援活動から得たいのちのつながり、また、暮らしや伝統を守り、自然や生きものとの共生を進める取組みを通して、私たちが何をすべきかを考える機会となりました。

第2部は、普天間かおりさんのミニライブに続き、絵話教室「黒田征太郎さんといのちを描こう」が開かれ、28組の親子が参加しました。子どもたちは黒田さんのアドバイスを受けながら、1時間余り一生懸命に絵を描きました。

また、いのちへの共感の考えを取り入れた市の取組みをパネルにし、豊岡市民プラザ、各総合支所を巡回展示して紹介しています。



▲子どもたちが感じた「いのち」を絵で表現

## 豊岡市障害者虐待防止センターを開設& 障害者虐待防止シンポジウム開催

10月から、健康福祉施設内に障害者虐待防止センターを開設(豊岡市社会福祉協議会へ委託)しました。

豊岡市障害者虐待防止センターでは、電話、ファックス、パソコンメール、携帯電話メーラーで、24時間365日、障害者の虐待にかかわる通報や届け出、支援などの相談を受け付けています。

それに先駆け、9月22日、豊岡市民プラザで、障害者虐

待防止シンポジウムを開催しました。

基調講演は、毎日新聞社論説委員の野澤和弘さんが、「障害のある人もない人も暮らしやすい街に」と題して行い、大阪府立大学人間社会学部社会福祉学科准教授の田垣正晋さんがコーディネーターを務め、障害者虐待防止センター職員、保護者、障害当事者などが意見発表を行いました。

## ラムサール湿地登録と歌舞伎上演に合わせて、ブックカバーへの広告掲出第4弾「出石・豊岡編」

首都圏を中心に書店を展開する三省堂書店の文庫本ブックカバーに、10月1日から1カ月間、本市イメージ広告第4弾を掲出しました。

今回は、近畿最古の芝居小屋である出石永楽館と7月にラムサール条約湿地に登録された円山川下流域・周辺水田を紹介し、豊岡の知名度アップと誘客拡大を図っています。



▲出石永楽館の歌舞伎上映と湿地で暮らすコウノトリをデザイン

### 主な市政の動き

#### 【9月】

27日・豊岡市議会基本条例制定

・豊岡市一般廃棄物処理基本計画(改定版)策定

・JR列車事故対応合同訓練

28日・豊岡市環境審議会

・スペースキッズ/JAXA見学と体験活動報告会

29日・第21回全国市町村交流レガッタ豊岡大会(30日)

・但東北部新泉源供用開始

#### 【10月】

1日・障害者虐待防止センター開設

・ブックカバーに豊岡市広告掲出(31日)

5日・清滝・西気小学校統合に向けた通学訓練

6日・南日本海子どもラムサール湿地交流会(7日)

8日・とよおか家族の日

・とよおかスポーツフェスティバル2012

9日・豊岡市・京丹後市合同会議

10日・豊岡ノーマイカーデー(毎月第2水曜日)

## これからの河川環境を考える国際シンポジウム

### ラムサール湿地・円山川から報告

10月11日、国際シンポジウム「これからの河川環境を考える」(国土交通省主催・世界銀行協賛)が東京で開催され、中貝市長が招待を受けました。

7月にラムサール条約湿地に登録された「円山川下流域・周辺水田」は、日本で初めて河川を主に登録された湿地です。コウノトリ野生復帰の取り組みの中で行われてきた治水対策と自然再生の融合、創出された湿地にコウノトリが舞い、それが地域活性化に結び

ついている事例は、世界に誇るべきものと評価されています。

シンポジウムでは、世界銀行開発研究グループ リードエコノミストのカール・ハミルトンさんが基調講演を行い、中貝市長は、「人と自然の共生―小さな世界都市・豊岡―」と題した事例報告をしました。また市長は、北海道大学大学院教授の中村太士さんをコーディネーターとしたパネルディスカッション「これからの河

川環境を考える―自然環境の保全・再生の価値―」にもパネリストとして参加しました。



▲河川の治水や自然再生などについて意見交換

## 第21回全国市町村交流レガッタ豊岡大会を開催

### ボートを通して、住民同士の交流やまちづくりに寄与

9月29日と30日の2日間、円山川城崎漕艇場および菊屋島運動公園で、「第21回全国市町村交流レガッタ豊岡大会」(全国ボート場所在市町村協議会主催)が開催されました。

東日本震災の影響で昨年本本市で開催しました。2年連続同じ市での開催は初めてのことです。

秋田県大潟村、南は鹿児島県薩摩川内市から109クルー、約800人が参加しました。台風が接近し、雨の中での開催でしたが、ナックルフォア500メートルの全レースを実施することができました。本市からは7クルーが参加し、中貝市長クルー「ハヤミーズ」も歓迎を込めてオープン参加しました。



▲色とりどりのユニフォームでスタートする選手

## 中貝市長の徒然日記 ⑥

10月20日

各地で大水害が発生した場合、必ずすることがあります。被災市町村長に対し「災害時にトップがなすべきこと」をメールで送り、併せてごみ処理の留意点を市の担当から先方の担当に送らせてみます。

任期の限られている市町村長にとって、大災害はほとんどの場合「初めての経験」です。私もそうでした。

豊岡は、平成16年の台風23号で大きな被害を受けました。死者7人、床上浸水以上約5千世帯。その数字の背後に、市民の途方もない苦しみが横たわっていました。

反省を踏まえ、豊岡から全国の大水害経験市町村に声を掛け、失敗の経験、反省、教訓などを集めました。それを「被災地からおくる防災・減災・復旧ノウハウ(水害サミット実行委員会事務局編)」として出版しました。

その本の冒頭に「災害時にトップとしてなすべきこと」を挙げています。

昨年9月28日の参議院予算委員会、和歌山県選出の世耕弘成議員が概要こんな質問をされました。

「中貝市長が和歌山県の被災市町村長にメッセージを送った。例えば、『ボランティアセンターをすぐに立ち上げる』判断の遅れは命取り。トップの判断を早くすること」

『トップはマスコミを通じてできるだけ住民の前に姿を現し、市役所も全力を挙げていることを伝えろ』。ところが総理はぶら下がり取材を拒否し、国民へのメッセージを発信していない」

野田総理の答弁です。「ナカガワ市長は私の友人でありますので…」

「ずっこけました。でも、そんな勘違いはどうでもいいのです。今年の6月、大水害経験市町村のトップが集まる水害サミットで、和歌山県、奈良県の市町村長が次々にお礼を言いに来られました。今年も含め、毎年のようにそんなメールを送り続けています。日本は、まさに「災害列島」です。備えよ、です。」